

默想：待降節第4主日 (A年)

默想のテーマ：「マリアは神の御業に心を開いた」「神は想像を絶する方法で人々に近づかれる」「救いへの渴望への応答」

マリアは神の御業に心を開いた

神は想像を絶する方法で人々に近づかれる

救いへの渴望への応答

マリアは天使の言葉を驚嘆の念をもって聞きました。「あなたは身ごもって男の子を産むが、その子をイエスと名付けなさい」（ルカ1・31）。そして、彼女の現在と未来を再構築する神の計画の前に恐怖で凍りつく代わりに、彼女は穏やかな確信をもって宣言します。「わたしは主のはしためです。お言葉どおりこの身になりますように」（ルカ1・38）。このような簡素な言葉が、神がこの世に入るための門となり、また私たちが降誕節に入るための門となることに、私たちは感嘆を禁じ得ません。「『わたしはここにいます』は人生の鍵となる言葉です。それは自己と自己の必要を中心に据えた水平的な生活から、神に向かって昇る垂直的な生活への移行を示します。『私はここにいます』とは主に献身することであり、それは利己主義の治療法であり、常に何かが欠けているという不満に満ちた人生への解毒剤です」^{〔1〕}。

「それゆえ、わたしの主が御自らあなたたちにしるしを与えられる。見よ、おとめが身ごもって男の子を産み、その名をインマヌエルと呼ぶ」（イザヤ7・14）。謙虚な女性が神の母となり、小さく取るに足らない村がメシアのゆりかごとなる。これが神の働き方です。同様に、私たちの人生においても、信仰に満ちた一見ささやかな応答が、平凡に見えるものを偉大な神の業へと変えることがあります。日々の最も単純な瞬間に、私たちも神に「はい」と応えることができるのです。予期せぬ友人との出会いの中で、時に単調な仕事の時間の中で、あるいは家族との温かな夕べの中で。

待降節も終盤を迎える、私たちは馬小屋作りの最後の仕上げを施すのに忙しかったかもしれません。倒れた羊を幼子の方に向かせたり、飼い葉桶の周りの乾いた苔を交換したり。こうしたささやかな行為は、神の絶え

間なく優しい招きに応えようと努める私たちの信仰を映し出しています。主よ、おいでください、遅らせないでください！私たちはあなたを必要とし、あなたの来臨を慈しみをもって準備しています。

「どのような人が、主の山に上り、聖所に立つことができるのか」（詩編24・3）。この深い憧れに満ちた言葉は、詩人の最も切なる願いの一つを表現しています。すなわち、神に近づき、その御顔を仰ぎ見ることです。しかしイスラエルの民はこの願いが叶わないことを知っていました。神の御顔を直接見る者は、その威光に耐えられず必ず死ぬと信じていたのです。だからこそ、全能者が幼子の優しい姿に御顔を現すことを選ばれた事実は、私たちを驚かせ続けます。この季節、私たちはベツレ

へムへと引き寄せられます。そこには二つの相補的な姿勢があります。神秘への畏敬と、それを我が家に迎え入れる温もりです。

神は人間の心が想像しうる以上に、はるかに寛大であられました。ただ慈しみ深く私たちを見守ったり、束の間の訪問をされたりしただけでなく、私たちの一人となられたのです。ぶどうの木と私たちを深く結びつけ、「わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である。人がわたしにつながっており、わたしもその人につながっていれば、その人は豊かに実を結ぶ」（ヨハネ15・5）と告げられました。私たちの存在全体は、秘跡と祈りと神の絶え間ない現存を通してキリストが与える命から養いを汲み取ることができます。神は人間としての生涯を選ばれました。それは私たちの人性に神聖な次元をもたらすためでした。

イエスはベツレヘムの洞窟でお生まれになりました。「聖書によると、『宿屋には彼らの泊まる場所がなかった』のである。イエスは今もあなたの心の中に宿を求めておいでになると言っても、神学上の真理から離れたことにはならない」^[2]。毎日が聖ホセマリアの助言に従い、イエスに心を開く新たな機会をもたらします。信仰とは単なる教義や抽象的な規則の集まりではありません。神を信じることは、まず御子を私たちの生活に迎え入れ、人生のあらゆる側面を彼と分かち合い、私たちの魂を新たなベツレヘムとすることです。もしマリアの世話、ヨセフの愛、そして数匹の羊の温もりによつて、彼が質素な馬小屋で安らぎを見いだせたのなら、私たちが日々の喜びと苦闘を捧げる時、私たちの心にも喜びを見いだしてくださらないでしょうか？

「天よ、露を滴らせよ。雲よ、正義を注げ。地が開いて、救いが実を結ぶように」（イザヤ45・8）。待降節第四主日の入祭唱は、救い主なる神への深い渴望を伝えます。しばしば私たちの祈りは、心の奥底からの叫びとなります。自らの限界に直面する時も、人生のささやかな恵みに喜ぶ時も、すべてが神の愛で満たされることを切に願うのです。神と共に生きることは、自己完結的な存在とは根本的に異なります。

御子は私たちを救うために人となられました。この救いは、父なる神が私たちに注がれた限りない愛に根ざしています。「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである」（ヨハネ3・16）。ベツレヘムの幼子を見つめながら、どうして神の慈しみと愛を疑えましょうか。私たちの人生のあらゆる出来事において

て、神が語りかけ、救いを与えてくださっていると確信できるのです。

愛する御子が馬小屋の貧しさの中に生まれるのを見守るマリアの苦しみは、想像に難くありません。しかし、そんな一見暗澹たる出来事の中にも、彼女は神の光が輝いているのを見たのです。「真に偉大なものは往々にして見過ごされ、平和な沈黙は、私たちの都市に特徴的な熱狂的な落ち着きのなさよりも実り多い」^[3]。私たちもまた、人生の細部に至るまで神を見いだせるよう、マリアの感受性と信仰に満ちた心を分かち合うよう、彼女に願い求めましょう。聖ヨハネ洗礼者が、マリアが近づいたとき母の胎内で喜びに躍ったように、私たちもキリストの誕生を祝うとき、喜びに満たされますように。

[1] フランシスコ、「お告げの祈り」でのことば、2018年12月8日。

[2] 聖ホセマリア『鍛』第274番。

[3] ベネディクト十六世、演説、2012年12月8日。

pdf | から自動的に生成されるドキュメント <https://opusdei.org/ja-jp/meditation/mokusou-taikou-4shujitsu-a/>
(2026/01/22)